

诗

6
2022

诗刊社[诗苑]



日本間

能村 研三

記念ビデオ作製

浮雲は眠りのかたち鳥帰る

春一番坂ある街の書肆廃る

清冷な笥の水に独活晒す

あるがまま春は行つたり来たりかな

とれさうな釘ちぎりぬ春秋

花の種文字書くやうに蒔きにけり

春コート本屋の中のわが順路

日本間に椅子ある暮し花明り

諸葛菜咲かす土塁は江戸名残

理科室へ一番に来るさくら冷

「沖」創刊五十周年を祝う祝賀会はコロナ禍による蔓延防止等のため三度延期された。五月二十四日は、二十一年目の登四郎忌である。その前の五月二十二日に、ついに規模を縮小しながらも開催することとした。名称も五十年新緑祝賀会と改めた。

前回の四十五周年の時にも披露した「沖の歩み」を映像で見せようとこれまでの五十年分の写真の抽出をした。今回は、沖の五十年の礎を築いてくれた人たちに焦点をあてて紹介したいと考えている。

二年前に刊行した沖誌「五十年記念号」では、メイン企画となった「沖の源流」に五三名の沖人と作品を紹介した。これまでの五十二年間、「沖」という同じ俳句の土俵をともにした人の熱い絆はこの上もない掌中の珠とも言える。

コロナ禍により会が二年近く延期される中、この祝賀会の日を一緒に祝つ

ていただきましたかたの方にも、延期されている間に体調を崩されるなど大きな変化を余儀なくされた事もあった。

そんな中、お客様として当日お祝いの言葉をいただくことになっていた、鈴木節子さんの訃報が突然入ってきたことは大きなショックであった。出欠を確認する電話の中の「二十二日はタクシーを乗り継いで、杖をついても行くので楽しみにしています」という元気な声が今でも耳に残っている。

節子さんが「沖」に在籍時代、勉強会に向かう途中の列車で先師登四郎と並んで座っている写真や、私と吉見の百穴で一緒に撮った写真も紹介しようと思っている。

数々の苦難を乗り越えての祝賀会となった。これまでの記念会に増して一生の思い出になることに相違ない。

能村 研三

物の怪や吉野に太き蝌蚪の紐
調教の馬場の静けさ朝桜
紋黄蝶牛の尻尾が楽しくて
春惜しむ賓頭盧に似し子規の顔
信心の薄きが集ひ草団子

源氏名をもらひ牡丹の疲れをり
争はず牡丹百花の競ひ合ふ

ここ十年ぐらい、ゴールデンウィークに旅行をしたことがない。もともと人混みの中へ行くのは好きではないが、以前は田舎へ帰る楽しみがあった。今は毎年田植えの時期と重なり動こうにも動けない。三反ばかりの一枚田であるが、田植えと稲刈りは業者に頼んでいて、いつもこの時期なのである。私の仕事は四月初めにトラクターで田起しをして、次に肥料を撒き、またトラクターで耕して水を張る。その後業者の代掻きと田植えが終了すると、水の管理と除草がまた私の仕事となるのである。

登四郎先生に「田を植ゑて三日の苗そよぎそむ」という句がある。

これからは水の管理で水を盗んでは盗まれる日々となるが、一日一日の苗の生長と付き合うのは楽しく、鴨も驚も来よう。青田となるまで瑞々しい空気をたくさん吸えるのである。

蒼茫集

ひかりを放つ

辻美奈子

*卒業に振る手ひかりを放ちけり
春泥や戦ふための手足にあらず
戦車を止めよ幾億の蝶の翅
さくら満つ遠忌は誕生日の如し
奥歯ちと建て付け悪し万愚節
リラ冷や古書店どこも北を向き

自画像

千田百里

*鷹女忌の鞆誰も居ぬから漕ぐ
春コートなびかせてより別世界
少女老ゆ花に着飾り酒酌むも
相聞の言問・吾妻橋おぼろ
父の忌の胼返りや春の雷
「もうよい」と遠忌の父や鳥雲に

桃の花

甲州千草

*心音の微妙な加速
桃の花
急行の忘れし駅の泥燕
クリップの繋がりがりたがる霧ぐもり
石割つて春へ伏せゆく庭師かな
筍や節々幾つ置みたる
作業着に光る機械油霾ぐもり

散り敷きて

栗原公子

引力の薄らぐあたり桜さくら
花疲れとふ豪華なる疲れかな
*散り敷きて嵩なきものに花の塵
理由など無し反抗も春愁も
石鹼玉高み目指してみたつもり
椿寿忌や栄螺のつぼの坐りよき

直線の街

峰町成視

リーダーの専制知らぬ蝌蚪の国
蒸しタオル揺らぐ春日の理髪店
野地蔵に手作りマスク万愚節
西郷どんの目に花疲れ人疲れ
*飛花落花二度とは乗れぬこの風に
陽炎や直線の街退屈で

祈りの容

細川洋子

花あしびしやらんしやらんと神楽坂
前傾は祈りの容白木蓮
花影震へし空爆の地よ遙か
臃濃くなるオルガンの弾き語り
約款といふ分厚き文書霾ぐもり
*憧れも予知も逃水の向かうがは

狩の血脈

須賀ゆかり

剪定

関根揺華

* 追へば吾に狩の血脈雉の声
海猫渡る七つ島置く潮境
針のごと乾く束子や多喜二の忌
若布舟夜明けの波を乗り越えて
春の雨蒼き日暮れを連れて来し

* 剪定の切らぬリズムと切るリズム
清明や真珠の秘めし涙色
春風のふはりきしめんに花鱈
まほろばの風はゆりかご蝶生るる
夜桜の水に映れば水の炎に

花の塵

鈴木光影

キリスト

菅原健一

* 立春の己を面白く削がむ
今宵手に無性に近き春の星
昼休み傘に落花をのせ戻る
一切を覆ひ尽せず花の塵
珈琲の湯気を目で追ふ新社員

春風に乗りたく靴を磨くかな
真新しき四月たちまち古びたり
つばくらめ天地無用を無用とす
* 春愁の山羊キリストの貌をして
胸高の帯の気構へ鷹女の忌

出口

遠城健司

風に東り

本池美佐子

沈丁花雨の帰宅を匂ひ立ち
地下鉄銀座出口三十春闌けぬ
職服の塗料まみれや桜まじ
* 国の過去わたくしの過去昭和の日
春の雨手入れせし庭また眺め

* 初蝶来風とは言へぬ風に乗
ざくざくと切れば水の香春キャベツ
春昼や浄土めきたる亀の池
引越しは軽トラ一台春の雲
日に透ける白磁の茶碗若葉風

日輪

栗坪和子

貝塚

平松うさぎ

黄塵^{ワシラチ}万丈日輪の何処なる
彼岸潮伊八の浪の飛ぶあたり
燭一つ足さむ二階の雛の間
その先の逃水を追ひ近江まで
* 夕星や白木蓮にみづの音

落し物地蔵に預けうららけし
胎内仏は胸の真中に花曇
柔らかな闇満ちてをり桜の夜
* 貝塚に貝の重なり飛花落花
石垣に矢跡のあまた花は葉に

花筏

大矢恒彦

ギャロップ

古居芳恵

* 朧夜のジャズのしづくの洩れきたる
チェロ弾きの指よく動く夕桜
鯉の背の崩す無頼ぞ花筏
花冷えや医院の柵に料理本
修羅の世の日当たるところ犬ふぐり

菖蒲の芽流れに確と直立す
春一番ひとり黙して自宅ヨガ
春しぐれ白き梔の美濃の街
* 春北斗キープの子等を掬ひしか
調教の馬のギャロップ風光る

飛鷹選評



能村 研三

卒業を父は畑で迎へくれ

柿内 清

一

そこはかとなく素朴なドラマを感じる句である。子の卒業式当日、父親は少し面はゆい面もあつてか、学校の通学路の自分の畑でいつものように仕事をしていた。卒業式を終えた息子は卒業証書を携え、いち早く父の待つ畑に向かった。野良着姿の父親は耕しの鍬を休めて、卒業という節目を迎えた息子の成長を心より祝福したのである。

桜大樹なぞへに小さき山羊の牧 河野 智子

牧歌的なゆつたりとした時間の流れに癒される句である。山羊が放たれた牧場のなぞえには大きな桜の樹があつて今年も見事に花を咲かせた。山羊は牧場の雑草対策のために飼育されることも多いと言われていて、なぞえの草々を食んでいた。

蓬摘むいつか独りに独り言

笠井 令子

蓬の柔らかい葉は香りが高く、餅に搗きこめば草餅となる。ひな祭りに供えるためか、搗き込んで蓬餅にするためなのか、何人かで野に出て蓬を摘んでいたのだが、その仲間もいつの間にかいなくなって一人になってしまった。その淋しさを紛らわすためか独り言を言っている自分が可笑しかった。

海鳴りは花菜明かりの向かうより

竹田 絹子

春の房総あたりの風景を詠んだものであるうか。一景の中の色彩の配合が見事で、菜の花の香りと黄色いふわふわの絨毯を一面に敷き詰めたような花畑の向うからは真つ青な海の声が聞こえてきた。

田起しや鳶ゆつくりと影落とす

青木 幹晴

「田起こし」は「田打」と同じで晩春の季語。田植に備えて田を鋤返す「代掻き」の準備作業で、春、気温が上がってくるとおこなう作業。田の土を起こして柔らかくし、肥料をまき、十分に柔らかくする。この作業に合わせるがごとく鳶が畑に影を落としながら旋回を続けた。

ものの芽の嬰包み込む手の形

中谷 恭子

ものの芽とは春のもろもろの草木の芽のことを言い、春の息吹を感じる言葉のひとつである。苞と呼ばれる芽やつぼみを包んでいる特殊な形をした葉は、まるで嬰を包み込んでいる手のような形をしている。

春灯を点せば去ぬと言はれさう

坂下 成紘

「去ぬ」とは「帰る」「去る」を表す言葉で、「去ね」となると、少し悪い言葉で「とっとと帰れ」や「失せろ」などの意味になる。来客に帰ることを促すつもりはないが、夕方に灯りを付けるタイミングも難しい。

沖作品



能村研三選

卒業を父は畑で迎へくれ

静岡

柿内 清一

* 雁風呂を焚けば静けき日本海

休館日ひがないちにち花吹雪

畦塗るや父祖相伝の鍬さばき

植樹せし子らは八十路の花守に

* 細枝の折れむばかりに小雀来

大分

河野 智子

廃屋の椿大樹の華やげり

春北風湯煙みんな海へ向き

春塵や古家の雨戸みな重く

桜大樹なぞへに小さき山羊の牧

耕耘機ひかりを均し春の土

* 蓬摘むいつか独りに独り言

蒼天を突く杉木立春まつり

梅白し崩れ土蔵の家紋なほ

山梨

笠井 令子

海鳴りは花菜明かりの向かうより

東京

竹田 絹子

サツクスの音色けだるい春の宵

分かち合ふ光の欠片犬ふぐり

朝の椀ほると綻ぶ露のたう

* 石仏に迫りし野火の叩かるる

* 田起しや鳶ゆつくりと影落とす

千枚田めぐり尽くして水温む

縄電車息を切らして青き踏む

草餅や幼き頃の日の匂ひ

無事祈る祖国の調べ花筏

ものの芽の嬰包み込む手の形

失せ物の見つかりし朝はつざくら

まんさくや半鐘見ゆる峽の里

散髪は風にまかせてねぎばうず

* のどけしや運転席に犬のゐて

青森

中谷 恭子

愛知

青木 幹晴